

文の長さと言点の打ち方の関係

Yuniarsih

Dosen Bahasa Jepang Universitas Negeri Jakarta

Abstrak

Penempatan koma dalam kalimat dari segi kepentingannya adalah jenis C (～が dll), diikuti jenis B (～ので dll), lalu jenis A (～ながら dll). Salah satu standar bagi penempatan koma adalah melihat struktur kalimat. Dengan cara ini kecenderungan penggunaan koma dapat terlihat meski tidak semua kalimat. Maka panjang kalimat dapat dipertimbangkan. Pada penelitian ini, 100 orang Jepang diminta untuk menempatkan koma dalam kalimat. Hasilnya menunjukkan adanya korelasi antara jumlah koma dengan panjang kalimat. Hasil penghitungan jumlah koma (y) dengan panjangnya kalimat (x) adalah $y = 0.040x - 0.716$. Kesimpulan penelitian ini adalah semakin panjang kalimat maka semakin banyak jumlah koma.

Kata kunci : cara penempatan koma, struktur kalimat, panjang kalimat, jumlah koma, jumlah huruf

1. はじめに

日本語の読点の打ち方は簡単に見えるが、実際に日本語の文章を書くとき、適切に読点を打つことは容易ではない。また、日本語の読点の打ち方が、事実として多様である。これは日本語の特性によるものと思われる。

以前、文の構造から見た読点の打ち方を調査した。その結果、従属度が低い従属節の後には読点が打たれやすく、従属度が高い従属節の後には読点が打たれにくいことがわかった。すなわち、南不二男（1974）の分類に従うと、B類とC類には読点が打たれやすく、A類の後には読点が打たれにくい。

文の構造から判断して読点を打つ箇所を決めると確実であるが、文の構造だけではなく文の長さによっても、読点を打つ箇所は定まってくる。

青空文庫に所蔵されている芥川龍之介の作品を分析した結果、A類であっても読点が打たれるが、B類であっても読点が打たれない例も見られる。例えば、

- (1) 弟子の僧は、時々気の毒さうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら、

A 類

こんな事を云つた。(鼻)

- (2) 所が鼻を踏まれてゐるので思うやうに首が動かない。(鼻)

B 類

本研究は、先行研究を踏まえて、日本人は実際にどのような箇所に読点を打つ傾向があるかを探り、現代日本語の文章における読点の打ち方について、特に文の長さの面から考察する。

2. 読点に関する研究

文の構造に関わる読点の打ち方の研究は岩畑 (1999)、小林 (2004)、山口 (2005) のものがある。岩畑 (1999)、小林 (2004) によると、独立性が低い従属節の後には、読点が打たれやすいという。山口 (2005) は岩畑 (1999)、小林 (2004) の見解に一致しているが、南 (1974) の理論を使用している点に相違がある。

南 (1974) は文の構造の理論とは、

A 類 ナガラ (継続)、ツツ、テ① (動作の様子)、連用形反復、連用形① (動作の様子：形容詞・形容動詞) 等。構成要素の範囲がもっとも限られている。

B 類 テ② (継起または並列的な動作・状態)、ナガラ (逆接)、ノデ、ノニ、バ、タラ、ナラ、ト、テモ、テ③ (原因・理由)、連用形② (意味はテ③と同じ)、ズ (ズニ)、ナイデ、等。構成要素の範囲が A 類より広がるが、次の C 類よりは狭い。

C 類 ガ、カラ、ケレド、シ、テ④ (その他) 等。構成要素の範囲がもっとも広い。

山口 (2005) が岩畑 (1999)、小林 (2004) の見解に一致している点は、B 類 (～ので等) と C 類 (～が等) の後には読点が打たれやすく、A 類 (～ながら等) の後には読点が打たれにくい。従属句が 2 つ以上ある複雑な文の場合、まず C 類の従属度が低い従属句の後には読点が打たれやすく、次に必要に応じて、B 類を選んで打つ。読点の打ち方は順番でいうと、C 類→B 類→A 類であるという分析である。

しかし、こうした構造面だけから考えても、実は読点使用の実態に説明できない面がある。例えば、(C類—B類—A類)の文であってもC類の後に読点を打たず、B類の後に読点を打っている人もいる。日本人のほとんどは、C類の後に読点を打つ。しかし、(C類—B類—A類)の文でも山口(2005)の理論でいうと、(C類—B類)のパターンであるが、(C類—A類)のパターンも可能である。小林(2004)、山口(2005)は、ここまで深く調査していなかった。思うに、読点の打ち方は文の構造だけでなく、文の長さや密接に関わっている部分があると考えられる。

一方で、読点を文の長さから見る読点の研究は少ない。本研究では岩畑(2004)を参考にする。岩畑(2004)は、読点使用の可否と文の長さとの間には、相関関係があるとする。通常、文が短い場合には、従属節と主節の間に読点を打つべきではない。読点がなくとも、十分に理解できるはずである。しかし、文が長ければ、従属節と主節との間に打たれた読点は役に立つこととなり、その文の構造を理解するための助けとなるという。

3. 研究の目的

本研究の目的は読点の打ち方と文の長さの間に関連があるかどうか、また、日本人が読点を打つときに、その読点数と文の長さの間に規則性があるかどうかを調査することである。

4. 研究方法

アンケートの回答者は(学生:50人、社会人:50人)で、19歳から60歳までの日本人を対象にした。調査は、2011年6月に実施した。アンケートは芥川龍之介が書いた青空文庫の『蜘蛛の糸』を使用して、読点が打たれていない46の文章に自由に読点を打ってもらった。

本研究ではエクセルで分析し、関係の強さを表す相関係数についても分析する。

5. 研究の結果

相関係数 r とは、2つの数値 x (文字数)と y (読点数)との関係をグラフで表現したものである。相関係数 r は、-1から1の間の値をとる。グラフが右斜め上になると相関係がプラス(項目 y の値が大きくなる)になり、右斜め下になると相関係がマイナス(項目 y の値が少なくなる)になる。

相関係数がプラスの値をとるときは、「項目 x の値が大きくなればなるほど、項目 y の値も大きくなる」という関係が成り立つ。

100人の日本人を対象としたアンケート結果（読点数と文の長さを測定）をグラフに記入すると、下記のような散布図となった。そして読点数（y）は、「 $y = 0.0416x - 0.7617$ 」という計算式で表せることが分かった。なお、0.0416及び0.7617とは、下記の散布図を元にエクセルで計算した結果判明した数字である。

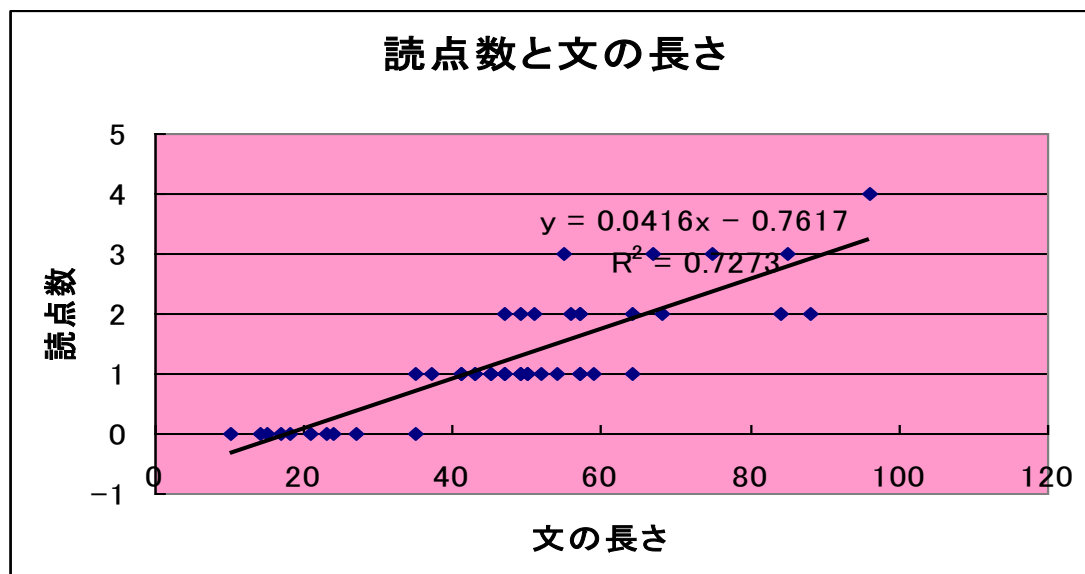


図1 読点数と文の長さ

説明：

文中の文字数と読点数の計算式

$$(y = 0.0416x - 0.7617)$$

$$y = \beta x - \alpha$$

$$y = \text{読点数}$$

$$\beta = 0.0416$$

$$x = \text{文の長さ}$$

$$\alpha = 0.7617$$

100人のデータを参考にしながら上記の計算式を見ると、75%の文に当てはまる。次のデータは、文中の文字数と読点数との関係を調べたものである。

表1 文字数と読点数

文	X(文字数)	Y(読点数)	平均文字数
文1	37	1	19
文2	67	3	17
文3	18	0	0
文4	54	1	27
文5	45	1	23
文6	68	2	23
文7	49	2	16
文8	50	1	25
文9	49	1	25
文10	47	2	16
文11	64	1	32
文12	43	1	22
文13	85	3	21
文14	56	2	28
文15	59	1	30
文16	57	2	29
文17	15	0	0
文18	23	0	0
文19	43	1	22
文20	24	0	0
文21	47	1	24
文22	57	2	19
文23	41	1	21
文24	49	1	25
文25	51	2	17
文26	50	1	25
文27	55	3	28
文28	35	0	0
文29	35	1	18
文30	84	2	28
文31	57	1	29
文32	47	1	24
文33	64	2	21
文34	17	0	0
文36	41	1	21
文37	10	0	0
文38	45	1	23
文39	14	0	0
文40	57	1	29
文41	52	1	26
文42	96	4	19
文43	88	2	29
文44	27	0	0
文45	75	3	19
文46	21	0	0
平均数	48.82608696	1.260869565	18.22222222

読点数：アンケートの回答者が最も多く回答した数を表す。

上記の計算式を使って、以下の文における読点数を調べてみた。

1) 47 文字中の読点数は「 $y = 0.0416x - 0.7617$ 」、 $0.0416 \times 47 - 0.7617 = 1.1873$ となり、四捨五入すると読点数は1である。

下記の例文は47文字である。ほとんどの日本人が1箇所読点を打つものと考えられる。

(3) 期末試験が来週に迫っているのは分かっていたがお菓子を食べながらテレビを見ていたので母に怒られた。

しかし、その1箇所の読点をどこに打つのであろうか。以前調査した結果によると、C類のところにもまず打つことが判明した。そして、この例文の場合も、ほとんどの回答者が接続助詞「が」の後に読点を打った。つまり、

- (4) 期末試験が来週に迫っているのは分かっていたが、お菓子を食べながらテレビを見ていたので母に怒られた。

表2 例文1の読点使用のパターン

パターン	読点使用のパターン	南不二男 (1974) (A類・B類・C類)	合計
1	読点なし	—	1 (1.25%)
2	「(接続助詞) が、」	C	35 (43.75%)
3	「(接続助詞) が、な がら、」	C、A	2 (2.5%)
4	「(接続助詞) が、の で、」	C、B	34 (42.5%)
5	「が、(接続助詞) が、ので、」	主語、C、B	3 (3.75%)
6	「(接続助詞) が、な がら、ので、」	C、A、B	1 (1.25%)
7	「が、(接続助詞) が、ながら、ので、」	主語、C、A、B	2 (2.5%)
8	「が、(時)に、(接 続助詞) が、ながら、 ので、」	主語、副詞、C、A、B	1 (1.25%)
9	「が、のは、(接続助 詞) が、ながら、の で、」	主語、主題、C、A、B	1 (1.25%)

2) 42文字中の読点数は $y = 0.0416x - 0.7617$ 、 $0.0416 \times 42 - 0.7617 = 0.9828$ となり、四捨五入すると読点数は1である。

下記の例文は42文字である。ほとんどの日本人が1箇所に読点を打つものと考えられる。

- (5) このレストランは禁煙なのでタバコは禁止しているが彼はタバコを吸いながら食事をしていた。

この例文の場合、ほとんどの回答者が接続助詞「が」の後に読点を打った。つまり

- (6) このレストランは禁煙なのでタバコは禁止しているが、彼はタバコを吸いながら食事をしていた。

表3 例文2の読点使用のパターン

パターン	読点使用のパターン	南不二男(1974) (A類・B類・C類)	合計
1	読点なし	—	2(2.5%)
2	「ので、」	B	1(1.25%)
3	「が、」	C	37(46.25%)
4	「は、が、」	主題、C	3(3.75%)
5	「ので、が、」	B、C	25(31.25%)
6	「が、は、」	C、主題	1(1.25%)
7	「が、ながら、」	C、A	2(2.5%)
8	「は、が、は、」	主題、C、主題	1(1.25%)
9	「は、が、ながら、」	主題、C、A	1(1.25%)
10	「ので、が、なが	B、C、A	3(3.75%)
11	「は、ので、が、は、」	主題、B、C、主題	2(2.5%)
12	「は、ので、が、ながら、」	主題、B、C、A	1(1.25%)

3) 48文字中の読点数は、 $y = 0.0416x - 0.7617$ 、 $0.0416 \times 48 - 0.7617 = 1.2282$ となり、四捨五入すると読点数は1である。

下記の例文は48文字である。ほとんどの日本人が1箇所に読点を打つと言える。

(7) 携帯電話で話をしながら運転するのは危ないと知っていたけれど緊急の連絡だったので仕方なく電話に出た。

この例文の場合、ほとんどの回答者が接続詞「けれど」の後に読点を打った。つまり、

(8) 携帯電話で話をしながら運転するのは危ないと知っていたけれど、緊急の連絡だったので仕方なく電話に出た。

表4 例文3の読点使用のパターン

パターン	読点使用のパターン	南不二男 (1974) (A類・B類・C類)	合計
1	読点なし	—	2(2.5%)
2	「けれど、」	C	47(58.75%)
3	「のは、けれど、」	主題、C	1(1.25%)
4	「あぶない (引用の前)、けれど、」	引用との前、C	3(3.75%)
5	「けれど、ので、」	C、B	14(17.5%)
6	「で (手法)、けれど、ので、」	手法、C、B	2(2.5%)
7	「のは、けれど、ので、」	主題、C、B	8(10%)
8	「で (手法)、のは、けれど、」	手法、主題、C	1(1.25%)
9	「ながら、引用と、けれど、ので、」	A、引用と、C、B	1(1.25%)
10	「で (手法)、ながら、のは、引用と、けれど、ので、」	手法、A、主題、引用と、C、B	1(1.25%)

上記の表を見てみると、文の長さ及び文の構造で読点を決めると言えるであろう。

5. おわりに

読点数と文の長さの間には関連性があり、文中の文字数と読点数との間には、ほとんどの日本人の読点の打ち方に、この計算式 ($y = 0.0416x - 0.7617$) が当てはまることが分かった。

表1を見ると、平均文字数は18である。18文字の後に読点を打ちやすいと言える。さらに、計算式から、文中の文字数に対する読点数は以下の通りとなる。

文字数	読点数
10~29	0
30~53	1

54~78	2
79~102	3
103~126	4

読点数と文の長さの間には関連性があり、文中の文字数と読点数との間には、ほとんどの日本人の読点の打ち方に、この計算式 ($y = 0.041x - 0.728$) が当てはまることが分かった。。

以上の計算式に当てはまらない例文も見られる、それは、接続助詞の後に読点を打つ傾向があることだけでなく、「は」の主題の後や接続的な表現の後にも読点を打つ傾向が見られる。文の長さからだけでは不十分である。日本人が読点を決めるのは文の構造だけでなく、文の長さポーズで決めると考えられる。

読点の研究は従来の表記上の問題点としてではなく、筆者の研究により、文の構造や文の長さ、さらにはポーズの視点も加えての総合的な文の研究へと進むことができたと考えている。つまり、読点の研究は読点使用の基準を探すような単なる表記の研究ではなく、話し言葉の視点も加えた新しい文研究の方向性を示すものとなったのである。

今後は、今回の研究を踏まえて、他の作家の作品や雑誌や新聞、一般的な日本人の文章を対象に読点の打ち方を分析し、その傾向を探ってみたい。

参考文献

- 石黒圭 (2007) 『よくわかる文章表現の技術 I—表現・表記編—』 明治書院
- 岩淵悦太郎 (編著者) (1960) 『悪文 第三版』 東京：日本評論者 107—115
- 岩畑貴弘 (1999) 「構造から見た日本語の読点」 『中央学院大学入門・自然論叢』 第10号 55—73
- _____ (2004) 「読点の使用とその決定要素について 構造と長さから」 『人文研究』 154
- 岡崎洋三 (1996) 「日本語読点の文法性について」 『平成8年度日本語教育学会春季大会予稿集』 日本語教育学会 55—60
- 小野泰央 (2005) 『句読点について』 群馬高専レビュー 24. 57-63

- 小林伊智郎 (2004) 「初級日本語における読点の打ち方について」『拓殖大学日本語紀要』14、69-77.
- _____ (2006) 「文型と読点の関係「ために」と「によって」について」『拓殖大学日本語紀要』 拓殖大学国際部 83-89
- 佐藤政光 (2000) 「日本語の読点について—規則の再検討—」『明治大学教養論集』331号、1-18.
- 姫本一枝 (1980) 「文章表現における読点の打ち方を適切にする指導」『富山大学国語教育』5 富山大学国語教育学会 11-23
- 広田栄太郎 (1959) 『用字の技術』東京堂
- 深瀬明子 (2004) 「読点の打ち方に個人差を生じさせている要因について」『山形大学日本語教育論集』6 山形大学教育学部日本語教育研究室 45-63
- 本多勝一 (1988) 「読点の統辞論 日本語のテンについての構文上の考察」『大人類学』19-3 京都大学人類学研究会 48-67
- 円山万治 (2001) 『日本語革命 読点の、正しい打ち方』文芸社
- 三上章 (1963) 「日本語の構文」くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の文の構造』大修館書店
- 森山卓郎 (2010) 「小学生の文章での句読点—小学校のそうじ作文—」『京都教育大学国文学 会誌』36)
- 文部省教科書局調査課国語調査室 (1946) 『くぎり符號の使ひ方：句讀法 (案)』文部省
- 山口佳也 (2005) 「構文論と句読法—テンの打ち方私案—」『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要第36集』1-10
- Yuniarsih (2010) 「現代日本語における読点の研究」『Kagami Jurnal Pendidikan dan Bahasa Jepang』Vol. 1 No.1 Jurusan Pendidikan Bahasa Jepang Fakultas Bahasa dan Seni Universitas Negeri Jakarta